

[自然から生まれた美 朝鮮陶磁展によせて]

## 高麗時代の水瓶とそのイメージ

当館所蔵の「青磁九龍浄瓶」(図1)は、高麗青磁を代表する水瓶の一つといえます。本来は受け皿である承盤を伴って墳墓より出土したとの伝来があります。頂部、肩、注口などに龍頭を象った彫刻がつけられ、それに伴い胴部には精緻な線刻により龍の体部が波濤の中にあらわされます。本稿では、高麗時代の水瓶にどのような思いが込められていたのか考えます。

浄瓶はもともと仏具としての水瓶の一種で、高麗時代には緩やかな曲線を描いて膨らんだ胴部より細長い首が長く伸び、鏝の付いた蓋を伴う形が多く見られ、肩より短い注口の付くものとそうでないものがあります。同時代にほぼ同じ形状で銅製の浄瓶があり、造形の影響が認められます。「青磁九龍浄瓶」は水瓶と龍のモチーフが一体化した造形になっています。口が皆開いていることから、釈迦誕生の際に九龍が釈迦に香水を注いだ場面をあらわすと考えられています。龍は古来より水神ともされることから、水瓶に龍のモチーフを取り入れることで水の浄の力を強め、守護する意味合いも兼ねていると思われます。青磁の浄瓶はその他、「青磁陽刻蓮唐草文浄瓶」(図2、根津美術館蔵)が器形、釉色、文様ともに緊張感と清々

しさを感じさせる名品として挙げられます。この作品では、文様帯を区画し、肩の上部に如意頭文と蔓唐草文を、胴部一面に蓮唐草文を陽刻しています。主文様の蓮唐草は浄土の池に咲く花であり、清らかなイメージを持っています。

唐代の義浄(635~713)撰である『南海寄帰内法伝』には、水を浄(飲用)と触(手洗用)に分けて瓶にも2種あるとし、浄は全て瓦甕を用い、触は銅鉄を兼ねる、とあります。ここでは陶磁器を銅・鉄器よりも高位に据えています。高麗時代においても青磁は貴重なものとされていたことは、北宋の使節団の一人として宣和五年(1123)に高麗を訪れた徐兢が著した『宣和奉使高麗図経』よりわかります。酒盛りの席を描写し、「器や皿は多くが鍍金或いは銀製で、青磁の器を貴しとしている」あります。また同著の中で、浄瓶の形状記述に続き、「貴人、国官、観寺、民舎は皆これを用いる、ただ水を貯えるものである」と述べています。これらから、高麗では浄瓶の形をした水瓶を水入れとして広く使用していたが、青磁は貴重であるため、多くは、現存作例にも見られる銅製の水瓶が用いられていたと想像されます。銀象嵌により文様が施された「銅製象嵌蒲柳水禽文浄瓶」(図3、大和文華

館蔵)は胴部に柳などの植物が大きくあらわされ、その下では鴛鴦のような鳥が水辺で遊んでいる穏やかな光景で、上方にも飛鳥を配して空間を示す配慮が認められます。

ここで、高麗時代の国家宗教であった仏教の中での水瓶を考えると、観音菩薩が最も結びつきの強い尊像として挙げられます。観音菩薩をあらわす持物には、楊柳と浄瓶があります。浄瓶は清らかな水を入れる容器として、観音の清浄さを象徴します。高麗仏画の観音像には水辺の岩座に坐す観音の傍らに置かれる、または手に持つ姿に水瓶が描かれ、その形状は現存する銅製または青磁の水瓶と同じです。さらに、より具体的に観音の力を水瓶によってあらわしている図像が鏡像に刻まれた図像の中に認められます。鏡像は、銅鏡の鏡面や銅板に仏像などを線刻したもので、中国、日本、朝鮮半島より出土しています。「灑水観音鏡像」(図4、高麗時代 韓国・国立中央博物館蔵)は、鐘形の銅板の両面に図像がやや粗い蹴り彫りで線刻されています。観音を線刻した面には、画面上方に観音が坐し、膝上に載せた右手に楊柳を持ち、傍らの竹林の前に水瓶が認められます。左手から水瓶にかけては銅板面がやや荒れて分かっていくようになっていますが、水瓶は卵形の胴部に細長い頸が付いています。頂部の口から流れ出る水は画面下方へと広がり、その中に観音の功德を示す諸難救助の場面があらわされています。雷雨に襲われる図、崖から落とされる図などが認められます。観音の諸難救助は『法

華経』「観世音菩薩普門品」に説かれる内容で、高麗仏画の「水月観音図」中にも見られますが、仏画では画面の下方隅に小さく描かれているのに対して、本鏡像では大きく配しており、観音の功德を中心的なテーマとしていることが見て取れます。また、諸難救助の描かれた背後には波が見られ、帆船の走る大海の上方に観音が浮かぶようにあらわされる構図をとります。通常描かれる岩座を取り払うことで画面を二分し、水瓶から出る浄水とともに、画面下方は水のモチーフを重ねています。諸難救助には巨海に漂流し龍魚諸鬼に襲われる難があり、大海の表現はこの場面と重ねられるとも考えられ、海難に対する観音の功德が強調されていると取れます。水瓶から諸難救助の場面が出る表現は他の鏡像及び絵画の現存作例には見あたらない極めて珍しい図像ですが、水瓶が観音の靈験をあらわす重要な役割を担っているといえます。

蓮華や蒲柳水禽などの水にまつわるモチーフが水瓶に描かれることは極自然ですが、「青磁九龍浄瓶」に見られるように、古来からの水神や仏教における龍のイメージがあらわされ、また、観音の持物としての水瓶に功德を示す手段としての役割が与えられている点から、高麗時代において水瓶、特に浄瓶は水を入れる器物以上の神聖な意味合いが与えられていたと考えられます。(図2は『世界美術大全集 東洋編』10 小学館 1998年より複写させていただきました。)(瀧朝子)

(図1)



(図2)



(図3)



(図4)



季刊 美のたより No.151

平成17年7月8日

発行 大和文華館